
外部評価報告書

－ 教育の成果 －

－ 教育の質の向上及び改善のためのシステム －

－ 学生支援等 －

平成25年3月

国立大学法人 上越教育大学

外部評価委員会

目 次

○ はじめに	1
○ 外部評価の実施について	3
○ 外部評価結果	9
I 全体的な講評	9
II 各基準ごとの特記事項	
基準1 教育の成果	12
基準2 教育の質の向上及び改善のためのシステム	16
基準3 学生支援等	19

は　じ　め　に

現在、国立の教員養成系大学、学部は、平成24年6月に文部科学省が示した「大学改革実行プラン」による国立大学改革への対応及び8月に中央教育審議会が示した「教員養成の修士レベル化」への対応と、大きな変革の時期に差し掛かっています。

上越教育大学は、昭和53年10月1日に、現職教員の研修・研究を目的とする大学院と初等教育教員に必要な幅広い総合的な資質を身につけさせことを目的とした学部を有する『新構想の教育大学』として、重要な使命をもって出発しました。その後、平成8年には教員養成系大学・学部として初めて博士課程（上越教育大学、兵庫教育大学、鳴門教育大学、岡山大学を構成大学とする兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）を設置し、更に、平成20年には教職大学院制度の創設に合わせ、大学院学校教育研究科に専門職学位課程（教職大学院）を新設しました。

『教育の総合大学』の体制を整えており、教育系大学の教育・研究を牽引・先導する大学としての上越教育大学は、その役割が明確にされており、今後の取組について大いに期待しているところであります。

さて、第1回外部評価委員会（平成24年10月1日：上越教育大学の創立記念日）において、若井学長からのご挨拶の中で、「本学は、毎年、自己点検・評価を実施し年次報告書としてまとめているが、外部の有識者による外部評価は今回が初めてである。忌憚のない率直な感想を含め様々な意見をいただきたい。」旨のお話がありました。

今回の外部評価委員は、教育委員会関係（地元、近隣）、学校現場関係、大学教員、OBにより構成されており、それぞれの立場で上越教育大学の教育に関する取組状況について見てきました。各委員の意見は、地元としての思い、教育現場としての思い、大学教員としての思い、OBとしての思いであり、この様々な角度からの上越教育大学への思いを重要視いたしたく、このたびの報告書では、委員会として意見をまとめた上で方向性を示すのではなく、各委員の意見をそのまま掲載しました。

上越教育大学におかれましては、私たちの思いを今後の大学運営や大学改革に少しでも役立てていただければ、また、そのためのヒントにいただければ、幸いに思います。更に、その結果として、教員養成を牽引・先導する上越教育大学の取組が、我が国の教育に大いに貢献できたのであれば、大変感慨深いものとなります。

最後に、私たち外部評価委員に、上越教育大学を知るこのような機会を与えていただいたことに大いに感謝するとともに、ますます上越教育大学が発展することを委員一同祈念しております。

平成25年3月

国立大学法人上越教育大学

外部評価委員会委員長

白 井 嘉 一

○ 外部評価の実施について

1 外部評価委員会委員名簿

(敬称省略, 五十音順)

ふりがな 氏名	現職等	備考
あらい かつひろ 荒井 克博	富山県教育委員会理事	
いべりょういち 井部 良一	全国公立学校教頭会顧問 (川崎市立はるひ野小学校長)	
うすい よしかず 臼井 嘉一	国士舘大学文学部教授	委員長
くさま としゆき 草間 俊之	新潟県立新潟高等学校長 新潟県高等学校長協会長 (前 新潟県教育委員会次長)	
なかの としあき 中野 敏明	上越市教育委員会教育長	
ほしな のぶあき 星名 信昭	上越教育大学名誉教授	

2 外部評価のスケジュール

日程	事項
平成24年10月 1日	第1回外部評価委員会 ・委員長選出 ・外部評価の実施 ・今後のスケジュール等
平成25年1月11日	第2回外部評価委員会 ・実地調査 授業・施設視察等 ・報告書(構想案)の検討
平成25年2月 8日	各委員が評価結果を委員長に提出
平成25年2月25日	委員長が評価結果を取りまとめ、報告書案を作成
平成25年3月 5日	報告書案を书面審議にて承認
平成25年3月12日	学長に報告書を提出

3 外部評価の実施方法

外部評価を行った項目は、平成24年度国立大学法人上越教育大学外部評価実施要項第4項により、平成23年度上越教育大学自己点検・評価実施要項第3項第1号に定める本学評価基準に関する状況のうち、次に掲げる事項を中心とする教育に関する内容である。

- ① 基準第6 教育の成果
- ② 基準第7 教育の質の向上及び改善のためのシステム
- ③ 基準第9 学生支援等

上記事項に関し、国立大学法人上越教育大学が作成した『外部評価自己評価書』及び関係資料等に基づき、検証及び評価を行った。

4 外部評価結果

外部評価委員会では、委員の独自の視点により分析・評価を行うこととした。

従って、各委員は評価結果を、『外部評価書』（「全体的な講評」並びに、それぞれの評価項目に関し「優れた点及び特色ある点」、「改善すべき点」、「改善、向上に向けた提言」及び「その他」に関し記述したものに）にまとめた。

そして、この『外部評価書』は、更に『外部評価報告書』として取りまとめ、外部評価委員会における評価結果とした。

5 外部評価委員会議事概要

(1) 第1回

平成24年度 第1回国立大学法人上越教育大学外部評価委員会 議 事 概 要	
日 時	平成24年10月1日（月） 13:10～15:10
場 所	上越教育大学中会議室（事務局2階）
出 席 者	<p><外部評価委員会></p> <p>臼井嘉一委員長，荒井克博委員，井部良一委員，草間俊之委員， 中野敏明委員，星名信昭委員</p> <p><上越教育大学></p> <p>若井彌一学長，戸北凱惟理事・副学長，渡部良和理事・事務局長， 加藤泰樹副学長，川崎直哉副学長，佐藤芳徳副学長</p>
配 付 資 料	<p>No.1 平成24年度国立大学法人上越教育大学外部評価実施要項</p> <p>No.2 国立大学法人上越教育大学外部評価委員会委員名簿</p> <p>No.3 外部評価自己評価書（別添資料を含む）</p>

- No.4 外部評価委員会の主なスケジュール等（案）
- No.5 『外部評価報告書』の作成について（案）
- No.6 平成19年度実施大学機関別認証評価評価報告書
- No.7 上越教育大学概要2012
- No.8 国立大学法人上越教育大学大学案内2013
- No.9 国立大学法人上越教育大学大学院案内2013
- No.10 平成25年度上越教育大学教職大学院案内
- No.11 平成24年度入学者用 履修の手引き（学校教育学部）
- No.12 平成24年度入学者用 開設授業科目一覧（学校教育学部）
- No.13 平成24年度入学者用 履修の手引き（大学院学校教育研究科）
- No.14 平成24年度入学者用 開設授業科目一覧（大学院学校教育研究科）
- No.15 学生手帳

次 第

1 開 会

- ・ 進行により，開会した。

2 上越教育大学挨拶，概要の説明

- ・ 若井学長から，挨拶及び概要の説明があった。

3 外部評価委員会委員・出席者の紹介

- ・ 進行から，外部評価委員会委員及び上越教育大学出席者の紹介があった。

4 議 事

(1) 委員長の選出

- ・ 若井学長の提案により，委員長に臼井委員が選出された。

(2) 平成24年度国立大学法人上越教育大学外部評価について

① 外部評価の実施

- ・ 川崎副学長から，国立大学法人上越教育大学の外部評価に関し説明があった。

② 自己評価書の内容説明

- ・ 川崎副学長から，外部評価自己評価書の内容に関し説明があった。

③ 質疑応答，意見交換

以下の内容に関して，質疑応答，意見交換があった。

- ・ 卒業生の授業評価アンケートの結果について
- ・ 教職キャリアファイルの活用について
- ・ 学生の授業評価に対する大学教員の自己評価について
- ・ 教育現場の現状について
- ・ コミュニケーション能力の育成に関する取組について
- ・ 教育実習，現職教員の教育と地元教育委員会等の連携について
- ・ 特別支援教育や国際的な評価・観点の重要性について

(3) 今後のスケジュール等

- ① 今後のスケジュール
 - ・ 委員長の指示により事務局から配付資料の説明があり，承認された。
 - ② 『外部評価報告書』の作成
 - ・ 委員長の指示により事務局から配付資料の説明があり，承認された。
 - 5 上越教育大学挨拶
 - ・ 川崎副学長から，謝辞があった。
 - 6 閉会
 - ・ 進行により，閉会した。
- 以 上

(2) 第2回

平成24年度 第2回国立大学法人上越教育大学外部評価委員会
議 事 概 要

日 時 平成25年1月11日（金） 10：30～13：32
(昼食 11：40～12：10)

場 所 上越教育大学中会議室（事務局2階）ほか

出席者 <外部評価委員会>
荒井克博委員，井部良一委員，草間俊之委員，中野敏明委員，
星名信昭委員

<上越教育大学>
若井彌一学長，戸北凱惟理事・副学長，渡部良和理事・事務局長，
加藤泰樹副学長，川崎直哉副学長，佐藤芳徳副学長

欠席者 <外部評価委員会>
臼井嘉一委員長

配付資料

- No.1 平成24年度第1回国立大学法人上越教育大学外部評価委員会議事概要
- No.2 実地調査について
- No.3 『外部評価報告書』の作成について
- No.4 外部評価委員会の主なスケジュール等（案）
- No.5 『外部評価報告書』の作成に係る事務連絡

机上配付① 平成24年度 第1回国立大学法人上越教育大学外部評価委員会議事概要
<参考>

机上配付② 国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）卒業者の教員就職率ベスト10

机上配付③ JUEN 2011秋 No.20

次 第

1 開 会

- ・ 進行により，開会した。

2 上越教育大学挨拶・臼井委員長欠席の報告

- ・ 若井学長から挨拶及び臼井委員長の欠席について報告があった。

3 日程説明

- ・ 進行から，本日の日程の説明があった。

4 実地調査

(1) 授業視察

- ・ 聴覚障害心理・生理学論
- ・ 理科観察・実験デザイン論

(2) 施設視察

- ・ 教職大学院多目的演習室
- ・ 特別講義室（講301）
- ・ プレイスメントプラザ（就職支援室）
- ・ 附属図書館ライブラリーホール
- ・ 附属図書館マルチメディアコーナー ほか

－昼食－

5 議事

議事に先立ち，若井学長から，臼井委員長が欠席のため，本日の議事の進行は本学川崎副学長としたい旨の提案があり，承認された。

続いて，川崎副学長から，前回の議事概要について確認依頼があり，特に意見等はなかった。

(1) 外部評価報告書の作成

① 『外部評価報告書』の作成

川崎副学長の指示により事務局から，配付資料により，前回の委員会で承認された『外部評価報告書』の作成について，説明があった。

② 今後のスケジュール等

川崎副学長の指示により事務局から，配付資料により今後のスケジュールについて説明があり，承認された。

③ 『外部評価報告書』の作成に係る事務連絡

川崎副学長の指示により，事務局から，配付資料により，各委員と事務局とのやり取りの方法について説明があった。

(2) 全体に係る質疑応答・意見交換

以下の内容に関して，質疑応答・意見交換があった。

- ・ 平成24年3月卒業者の教員就職率について
- ・ プレイスメントプラザ（就職支援室）における支援について

- ・ 施設の状況について
- ・ 授業視察に関して，授業方法について
- ・ 小学校における理科の観察・実験指導に係る教員養成の取組について
- ・ 理数科教員の養成について
- ・ 学生への学力観の定着について
- ・ 新潟県内児童・生徒の学力の傾向について
- ・ プレイスメントプラザ（就職支援室）の利用率等について
- ・ 学生の学ぶ姿勢について

6 上越教育大学挨拶

- ・ 戸北理事から，謝辞があった。

7 閉会

- ・ 進行により，閉会した。

以 上

○ 外部評価結果

I 全体的な講評

今回の外部評価は、①教育の成果、②教育の質の向上及び改善のためのシステム、③学生支援等の3点の内容に関し、上越教育大学が作成した自己評価書(書面調査:第1回委員会(平成24年10月1日))及び視察(実地調査:第2回(平成25年1月11日))の形態により実施した。

上記内容に関する上越教育大学側からの情報提供と資料開示は、適切に行われており、外部評価を行うには十分であったと言える。なお、時間的な制約もあるが、欲を言えば、委員が学生等に、直接、意見聴取をできる場があると、実態・実状をより実感できたのではないかと意見があった。

上越教育大学は、創設時には学部及び大学院修士課程であったものが、その後、大学院博士課程(兵庫教育大学、鳴門教育大学及び岡山大学との連合)、大学院専門職学位課程(教職大学院)が設置され、また、附属学校園や学校教育実践研究センターなどの施設を合わせ持っていることから、まさに「教育の総合大学」の姿が備えられているといえる。

さて、この「全体的な講評」では、上越教育大学の取組で『**評価される点**』、また、「教育の総合大学」としての体制を整えている上越教育大学だからこそ『**今後期待される点**』というカテゴリで述べさせていただくことにする。なお、ここでの記述内容、また、次に述べる「Ⅱ 各基準ごとの特記事項」(12頁～)の記述内容は、立場が異なる委員の意見をそのまま上越教育大学に伝えた方が、大学運営により生かしてもらえるのではないかと考え、本委員会として意見の統一は行わずに、あえて各委員の意見をそのまま生かした形で記述することとした。

それでは、まず、『**評価される点**』についてである。

- (1) 学生を大切にし、教育課程、教員の授業力向上の努力、各種手引き資料・ガイダンス、施設・設備の整備などあらゆる点できわめて優れた取り組みが行われており、感心した。
- (2) 教育的な側面において、
 - ① 学部、大学院修士課程では、教員を養成する、専門職学位課程では、教員のリーダーを育成するという目的が明確であり、それぞれの目的のもとに教育課程が編成されている。
 - ② 大学の目標実現への明確なシステムという点で、大学としてのねらいが教員養成、しかも学部は初等教育、大学院は初中等教育というように明確であるがゆえに、その実現方法、具体的には「上越教育大学スタンダードに準拠させて設定した教科のルーブリック及び知識・理解・技能等」が系統的・具体的に示されていて、学ぶ側も課題意識をしっかりと把握した上で学べるところが素晴らしいところである。
 - ③ 大学の理念と目的に即して学部及び大学院のカリキュラムが整備されていた。更にファカルティ・デベロップメントと学生の授業評価やアンケート等を基にカリキュラム改善が適切に行われている。このことは授業の参観で、周到な教材資料の準備と教育機器の適切な活用、などで確認できた。
 - ④ 恵まれた環境の中で学生は自らの目標に向かって着実に努力し、教員としての資質や能力を養成するために取り組んでいることを感じる事ができた。

学びの環境では、何より多くの授業(講義)が少人数で進められているところに教育的効果と教師としての多くの学びの機会ができています。授業は指導内容の理解定着が目標ではあるが、そこに至るまでの教師の指導法やなげかけ、学習者との関わりなどを学ぶことも大切である。在学中に様々な指導法や学び方というものを体験することが、実際に教師となった時に大いに役立つことは確かである。

また、学内には附属図書館をはじめ、学生の学びをサポートする環境がよく整っていることがわかった。自ら学びたい時に支障なく学べる環境を提供することも大学の大きな役割であると感じた。

(3) 学生支援的な側面において、

- ① 学生への個別指導への取り組みとして、「教職キャリアファイル」を全学生に配布し、卒業、そして教職への道筋を確認しながら、学びを深めている。更に、それがネットワーク上に掲載され、学びをサポートする教職員らの助言を受けられるということは大変有効であると感じた。

これは、学生の時だけではなく、現職の教員となった場合には継続して、自己の教職への取り組みの履歴としていくことは大変貴重な実践記録になると感じた。日々の対応に追われ、なかなか記録を残すことのない現職の教員にも導入したいシステムであると感じた。

- ② 学生の卒業までの学びをサポートするだけでなく、その後の就職を支援することは大学の大きな役割である。プレイスメント・プラザ(就職支援室)はとても充実した就職支援を行っていると感じた。日本全国の都道府県の教員採用試験問題や受験者からの細やかな情報提供など資料が充実していた。また、専門の相談員(キャリアコーディネーター:公立学校の校長経験者)が常駐し、学生の就職へのアドバイスをを行っている。最終的な目標は教壇に立つ教師になることであるから、その実現に向けての支援を手厚くすることは嬉しいことである。

- ③ 学生の学習環境が整備充実されていた。とりわけ情報環境の整備と附属図書館やプレイスメント・プラザ(就職支援室)の充実が目を見張るものがあった。

(4) 教育委員会等との連携の点で、

- ① 教育実習等に関し、大学のカリキュラムが地元の公立学校との関わりを持ちながら進めることを強く意識して作成されている。例えば1年次から4年次までの計画的な教育実習は、多くある4週間だけ濃密に学校に入ることよりも、長期にわたり、継続的に学校現場に関わっていくほうが、学生の学びも深まるであろうし、何より学校への愛着心が芽生えてくると想像できる。それは学生にとっても、学校(子ども達)にとっても互いに有益なことである。もちろん、その実現には教育委員会や実習校との密なる関係が基盤であり、大学への期待があつてこそそのことである。

- ② 現職教員の研修という点からは、以下のことを感じた。

教員の研修の必要性・重要性は言うまでもないことであるが、法定の初任者・10年経験者研修を始め、様々な研修が各教育委員会のもと行われている。また、教員免許更新のための受講もある。上越教育大学教職大学院は多くの現職教員が在籍し、自らの資質を高める研究研修を進めている。現職研修の受け皿としての大学の役割が大きくなっているが、その部分を積極的に担っていただいていることは大変嬉しいことである。

- ③ 県教委や市町村教委と連携するなど、常に学校現場と密着した教育、理論研究、実践研究を基本として、地域に根ざした即戦力としての教員養成、学校現場の実態を踏まえた研究、教育改善に心がけている。

- ④ 開かれた大学として地域密着している。教職員と学生が労を惜しまず例えばフレンドシップ事業やボランティアとして小中学校や地域と連携協力を進めている。

「学びのひろば」に参加し自然観察や理科の実験など楽しく貴重な経験が出来たこと、管楽器フェスティバルの練習に学生の懇切丁寧な指導補助があつて助かったことや大学の吹奏楽演奏会に招待されて一緒に演奏できて感激していたこと、などを聞くにつけ、大学が地域の学校や児童の中に溶け込んでいる様子が分かる。また、様々な連携プロジェクトへの研究協力など地域や各種学校との地道な連携協力活動が認められる。

次に、『今後期待される点』についてである。いくつかの意見を記述させていただいたが、この点については、上越教育大学が、我が国における教員養成の中核を担っているとの認識の下に更に向上していただくことの期待の現れであることをお含み置き願いたい。

- ① 教員への就職率は、各都道府県の採用状況等にも影響されることから、評価には難しいものがあるが、平成24年3月卒業者の68.3%という数字は、他大学に比べて健闘しているものの、正規と臨時を含めた数字であること、教員養成に特化された大学であることを考えれば、80%以上を期待したい。
- ② 教員のリーダーを育成する専門職学位課程は、県教委や市町村教委と連携し、学校現場に戻った教員の追跡調査を行うなど、教育の成果が上がっているかどうか、期待に込めているかどうか、綿密に調査し、フィードバックする必要がある。
- ③ 学校現場は、学級崩壊やいじめ問題、不登校や学びからの逃避など、様々な問題を抱えているが、そうした現場で日々奮闘する現職教員を大学に招くなど、より学校現場と密着した教員養成であって欲しい。
- ④ 若者たちには、ポピュリズムやマニピュレーションに打ち克つためにも、豊かな教養を身に付けて欲しいことから、教養教育に力を入れてほしい。
- ⑤ 教員養成大学として、現在の国の教育方針や教育行政、学校教育について、発信して欲しい。
- ⑥ 学部生と大学院生のための施設設備の充実と学習環境が整備されて時間的ゆとりが生じているはずで、それを文化や芸術等から得られる深い人間理解に向けられるような示唆と支援が望まれる。つまり、纏まりの良い教育の総合大学ではあるが、単科大学の欠点を補う工夫が常に必要と思われる。
- ⑦ 海外教育研究など異文化理解や国際的感覚は、これからの教員にとって重要と思われる。現在進められているプロジェクトを更に進め、留学生の受け入れだけでなく、上越教育大学の学部生・大学院生の海外研修の機会を拡充させ、学生の留学推進も考えて欲しい。

最後に、国立大学法人化は、従来の「護送船団方式」から脱却し、新たな大学づくりを課題としているが、その点で、上越教育大学は「新構想大学・大学院」船団の一員として重要な研究・教育活動・地域連携活動を進めると同時に、一法人としての「教育大学」として現在の「教員養成の高度化」を見据えて、この上越地域にふさわしい新たな活動をどこまで展開しうるかがポイントのように思える。

II 各基準ごとの特記事項

ここでは、それぞれの評価項目に関し、「優れた点及び特色ある点」、「改善すべき点」、「改善、向上に向けた提言」及び「その他」に4つの内容で、委員の独自の視点により分析・評価を行った。従って、各員からの意見を、そのまま記述してある。

なお、『改善すべき点』として掲げた内容は、「大学としての質保証の観点から問題があり、速やかに改善を望む」という内容のものではなく、上越教育大学への要望事項として今後検討して欲しいという内容である。また、先程も述べたとおり、ここでは、委員の独自の視点により分析・評価を行ったものであることから、各委員がその立場において個々に感じていることとして受け取っていただきたい。

更に、「改善すべき点」のほか、「改善、向上に向けた提言」についても、より高い位置での役割を目指している上越教育大学として、1つでも今後の大学運営に役立てていただきたい。

基準 1 教育の成果

評価基準

1-1 教育の目的において意図している、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、教育の成果や効果が上がっていること。

1 優れた点及び特色ある点

- 取り組みの成果が、①学生の授業方法・内容等に対する満足度の高さ、②教員免許状取得率の高さ、③きわめて低い留年率、④高い教員就職率となって現れていることが認められる。
- 上越教育大学スタンダードにより、組織的、計画的、継続的な指導に全学一体となって取り組むことが可能になっている。
- 教育実習について、きめ細かな評価表の活用や大学と実習校との連携体制の整備などきわめて充実している。
- 専門科目、ブリッジ科目、教養科目がバランスよく配置されている。
- 上越教育大学の教育目的は、教育者としての「使命感」・「人間愛」・「創造力」を有する教員の養成を目的とすることが「大学憲章」、「上越教育大学学則」において明記されている。教師はもちろん深い教育理論や指導方法を身につけ、高い専門性を備えることが必要であるが、その前提として、人としての、教師としての「心」を持つことを求められている。そのことを大切にしている教育方針がとても優れていると感じることができた。
- 学修成果を確認する具体的項目と到達目標を示したものとして、「上越教育大学スタンダード」、小中学校の教科・学年ごとに、教員になる上で学生が修得すべき知識・理解・技能等の一覧(ルーブリック)など、学生が学ぶべき項目やねらいが明確に示されていることが素晴らしい。

前述の教育課程を確実に進んでいるか、また、自らの学びの軌跡を記すものとして、教職キャリアファイルを全学生が記入し、自らの学びに役立っている。更には教職員の学生への個別のサポートにも活用できる貴重なものであると感じた。

- 学生が各学年・卒業段階で、修得すべき到達段階や確認指標を示した「上越教育大学スタンダード」に準拠させて設定した教科のルーブリックに基づいたカリキュラム改善を行うなど教員養成の目標に沿って計画的取組がなされることによって、教育の成果や効果が上がっている。
- 各授業ごとに行っている「学生の授業評価アンケート」調査によれば、約80%の学生が、大学の授業で学んだ内容が、自分の将来に大いに役立つ、多少役立つと回答している。
また、「現在小学校に勤務する正規、臨時教員へのアンケート」調査でも、約80%の教員が、大学の授業で学んだ内容が、自分の将来に大いに役立つ、多少役立つと回答している。
- 新構想の国立教育大学として、創設30余年の積み上げを通して、学部、大学院修士課程、大学院専門職学位課程及び博士課程を擁する「教育総合大学」としての充実した全国ブランドの教員養成、研修体制を整えてきた。
- 教育目的は、「学則」「大学憲章」に教育者としての「使命感」・「人間愛」・「創造力」を有する教員を養成すると明記している。
- カリキュラムマネジメントが、「ルーブリック」や「教職キャリアファイル」など独創的取組を取り入れながら検証・評価・改善に着実に取り組んでいる。
- 教員免許の取得状況も大学院で「教育職員免許取得プログラム」の導入など積極的な施策により順調に伸びており、教育の成果が認められる。
- 卒業後の進路実績も平成24年3月卒業生のV字改善は注目するところである。
- 「学生による授業評価」の実施は、取組姿勢そのことを高く評価する。
- 大学憲章にみられる如く高い教育目標を掲げており、その目標に向かって綿密なカリキュラム編成による教育が実施され、厳正なデプロマポリシーに照らしてその成果が評価されている。これらの実績は学生による授業評価や教員採用試験成績で確認できる。

2 改善すべき点

- 各教科・学校種ごとのルーブリックにおいて習得すべき事項が致密に計画され、また実際の授業においても観察・実験が多く行われており、高く評価できる。今後は特に、理科、数学に対する全ての学生の興味・関心、指導力の向上に努めていただければありがたい。
- 学んでいることを理解させることは優れた点であるが、その学んだことを社会に出てどう活かすかについては、それぞれの授業科目の特性を踏まえて更に改善すべき点である。
- 教員養成に特化していることもあるが、教育課程を見ると、スキルを身に付けるための授業ばかりで、教養を身に付けるための授業が殆どないことから、教養教育にも力を入れるべきである。
国語や数学、英語は勿論、世界史、日本史、地理、倫理、政治経済、物理、化学、生物、地学についての教養授業をカリキュラムに位置づけるべきである。
- 成績優良者と不振者の二極化傾向が進行していることを放置せず、その実態を直視し、早期の対

策に着手すべきである。

- 卒業生・修了生へのアンケート調査は、教育の成果・効果を検証するに足る調査とするように内容項目など研究し改善すべきである。
- 良い学生をたくさん集めよう。「ぜったい先生になりたい学生」が育つ大学としての教育とその成果を、学内だけでなくもっと教育現場や社会に広報したいものである。
- 学部、修士課程・専門職学位課程及び博士課程を持つ教育の総合大学のメリットがまだ充分には生かされていないように感じられた。特に博士課程の院生の活動や活躍の全学的認識が希薄と言えるのではないだろうか。

3 改善、向上に向けた提言

- 教職は主体的で創造的な取り組みが高度に求められる職業であることから、学習への取り組みを学生自身の主体的な判断・行動に委ねる部分をどの程度設けるかが課題の一つである。
- 対人関係能力、コミュニケーション能力を高めるために、体験学習や学校ボランティアが重視されており評価できる。今後とも、地域社会の諸活動への自主的参加を促していただきたい。
- 近年、書く力が十分身につけていない教員も見受けられることから、その養成にも努めていただきたい。
- 人間としての魅力や児童生徒を感化できる能力を高めるために、幅広い教養を身につけるための指導をお願いしたい。
- 「教職キャリアファイル」は教師としての研究研修等の取り組みの履歴となる貴重な情報であると感じている。学生での活用を更に進めていただきたいことと、更には教師となったあとでも継続して活用できるものになると良いと感じている。また、現職教員も各自の教職キャリアファイルを持つことが理想である。
- 大学における「勉強(学び)」とは、「究極的には独学であり自分のことは自分でというスタンスも必要」である。そのような観点から教育の成果を点検できることが重要である。
- 児童生徒は、文化の継承者であり、文化は教養であることから、教員には、文化的で豊かな教養が必要である。
 - 小学校の教員だから、小学校ではそんな難しいことは教えないから不必要ではなく、教員としての教養である。
 - ある程度のスキル教育も必要だが、教養教育は、教員を目指す若者には、特に必要であり、豊かな教養は、児童生徒を引き付ける武器である。
 - 授業を開講できないなら、読書による独学で教養を身に付けるという姿勢を持たせて欲しい。
 - 勿論、大学進学を意識しすぎた高校教育も大いに問題であり、教養を意識した日々の授業や教養を身に付ける読書など、教養主義の復活が必要であると考えている。
- 学力向上は学校にとって不易の課題である。そして、それは教師の「授業力」に負うところが大きい。我が国の教師は「基礎的な知識・技能」を教え定着させる指導力はあっても、「思考力、判断力、表現力」

や「自ら学ぶ意欲」「主体的に取り組む態度」の指導力は弱い。その原因は、高等学校、中学校の多くの教師の授業方法に問題があると考えている。

そこで、注目したのが、上越教育大学が求める「創造力」を有する教員の養成である。具体的にその視点からの臨床研究を深め、学生の指導に明確に生かす施策に取り組んでほしい。

- たゆまない授業改善ファカルティ・デベロップメントを基に、学生のニーズを踏まえたより良いカリキュラム編成が毎年なされていくような取り組みを期待したい。
- 学生の単位取得状況などを細かく調べ分析しているが、その結果を改善するための具体策とその実現を更に進めて欲しい。
- 学部生と修士課程・専門職学位課程や博士課程の大学院生の人的交流のチャンスを増やすこと、大学院生の研究会や発表会などを学部生が見学できるような措置を検討すること、カリキュラムの相互補完的な仕組みは考えられないか、など知恵を絞って欲しい。

4 その他

- 特記事項なし

基準2 教育の質の向上及び改善のためのシステム

評価基準

- 2-1 教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて改善・向上を図るための体制が整備され、取組が行われており、機能していること。
- 2-2 教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われていること。

1 優れた点及び特色ある点

- 教育者としての「使命感」・「人間愛」・「創造力」を有する教員養成を目指すとの明確な目標が掲げられ全学一体となって指導に当たられていることが十分伺われ、大いに評価できる。
- カリキュラム企画運営会議を設置し、教育課程の検討・改善に絶えず取り組まれている姿勢が評価できる。
- 「ファカルティ・ディベロップメント研修会」や教員による「授業公開」など教員自身の授業力の向上に努められていることが高く評価できる。
- 新潟県教育委員会、新潟市教育委員会との連携推進協議会が設置されるなど学校現場が求める指導力豊かな教員養成に真摯に取り組まれている。
- 学生による授業評価アンケートの実施と事後の教員による「自己評価レポート」の実施により授業改善に積極的に取り組まれている。
- 学生の卒業後のフォロー、支援もなされており、評価できる。
- 各組織及び各教員は自己点検・評価を毎年行っている。また、授業については学生のアンケートも実施し、教育の改善に反映するように努力している。
- 教育実習に関して妙高・糸魚川を含む上越地域が、学生を受け入れる事に対して地域の使命と考え、大学と一体となって進めている。
- 学生による授業評価アンケート等の自己点検・評価や外部委員による評価など、改善に努めている。
- 卒業し、学校現場にいる正規教員や臨時教員にも、大学教育についてアンケートを実施している。
- 授業に対する学生からのアンケート評価を受け教員の「自己評価レポート」を義務化し、かつ、教員と学生が相互に働きかけて共に授業を構成するという協同関係を築くことを意図し、授業評価報告書として学内者向けホームページで公表している。教員と学生が相互の働きかけで授業を作り上げるということを互いに意識できる素晴らしいシステムである。
- 「ファカルティ・ディベロップメント研修会」や学外の教育関係者等を対象とした授業公開の開催は教育の質の向上や授業改善に資するものである。
- 学外関係者(教育委員会、教育実習協力校、卒業生が勤務する学校現場等)との情報交換会で把握

した課題・意見を反映して事業を起こす(例; CST (理数系教員養成拠点構築授業))など、積極的に教育現場のニーズに対応した特色ある大学教育を推進している。

- 大学教育の到達目標を定めて学修成果の確認を的確に行っている。
- 一年生の少人数クラス担任制や教育支援制度など学生のニーズに合わせてきめ細かな手立てが実施されている。
- 科学研究費補助金とGP (Good Practice) の採択率が高かった。上越教育大学の教員やカリキュラムの優位性を示している。
- 情報環境が整備され学生の自習室等の設置とその活用が認められた。特に附属図書館と就職支援室の充実は今後教育成果として現われるであろう。

2 改善すべき点

- 学生や教員へのアンケート調査については、調査項目や方法等についても、マンネリ化を防ぐためにも、常に工夫改善を図る必要がある。
- 国際交流を更に進めることは大学にとっても教育の質の向上にも資するものと思われる。

3 改善、向上に向けた提言

- 授業評価アンケートで評価の低かった事柄についての分析・改善を丁寧に行うことが必要である。
- 新潟県や近隣県の学校教育の向上のために積極的な提言、助言をされ、地域の教育拠点としてリーダーシップを存分に発揮されたい。
- 授業改善が叫ばれ、学習者主体の授業が求められている。学生も学校現場に出れば、即求められる課題である。大学の授業も可能な限り、講義形式を少なくし、学生の学び合い、ICT 活用など指導法の工夫を更に進めていただきたい。
- 従来の、いわゆる「新構想大学・大学院」としての実績を踏まえつつ、国立大学法人化という新たな時代にふさわしい諸課題の一つとして教員養成高度化に向けた上越地域の現職教員の質的向上を位置づけ、場合によってはアメリカの事例のような現職管理職の「博士」修得をも視野に入れた検討も必要ではないか。
- 学生や教員へのアンケート調査の調査項目や方法については、学生や外部委員、学校現場の教員等にも参画してもらうなどして、常に検証することも必要ではないか。
また、結果の検証について、数字のとらえかたなどについても、学生や外部委員、学校現場の教員等が参加することは意義がある。
- 外部委員による評価については、説明や資料等だけではなく、学生との懇談会等により、直接学生の声が聞こえるようにしたらどうか。

- 上越教育大学は、教師には「授業力、臨床力、協働力、即応力」を育成することをコンセプトにしている。であれば、そのモデルとなり得る「人」にふれることが学びの第一歩であるといえる。上越教育大学の附属小・中・幼の学校園には、優れた指導力をもつ授業名人がいる。教育実習期に限らず、学生や院生が附属学校園に出かけて、また、附属学校園の教師が大学の授業・講義の一部を担うなど、意図的、組織的、継続的にということである。
- ITの普及や学生のニーズの多様化に対する対策は更に進めて欲しい。
- 施設・設備が整ってもそれを有効に活用するソフトの検討を一層進めてほしい。例えば、教育実習に活用するなど就職支援室に訪れる学生を増やす手立ては考えられないだろうか。

4 その他

- 特記事項なし

基準3 学生支援等

評価基準

- 3-1 学習を進める上での履修指導が適切に行われていること。また、学生相談・助言体制等の学習支援が適切に行われていること
- 3-2 学生の自主的学習を支援する環境が整備され、機能していること。また、学生の活動に対する支援が適切に行われていること。
- 3-3 学生の生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。

1 優れた点及び特色ある点

- 各種ガイダンスやキャリアコーディネーター配置など、学生の履修相談、生活相談、進路指導が行き届いている。
- 意見箱の設置やアンケートの実施など、学生のニーズ把握に誠実に努めている。
- プレイメント・プラザ(就職支援室)、附属図書館のマルチメディアコーナー、自習スペースなど施設の面でも学生本位の配慮がなされている。
- 学生数に対する専任教員数が多く、指導体制が充実している。
- 附属図書館など学生の自主的学びへの適切な支援環境
- プレイメント・プラザ(就職支援室)において、全国各地の学校や教員採用試験の情報を備えていたり、キャリアコーディネーターによる個別の進路相談を実施しているなど、学生一人ひとりへのこまめな就職支援がなされている。
- 教職員の方々の学生をサポートしようとする気持ちがいろいろな場で感じられた。
- 学びの広場という課外活動で、学生が自分で企画して周辺の子どもを集めて自主的活動をしている。
- 授業出席状況把握、セーフティーネット、コミュニティサービスからなる「学生支援オールインワンカルテシステム」を実施している。
- 大学や大学院案内等の内容が、具体的で分かりやすく、学生や院生からの大学紹介やメッセージも多く掲載されており、充実している。
- 授業科目一覧や履修の手引きも至れり尽くせりである。
- JUEN, 学園便りは、キャッチコピーにも惹かれ、内容豊富であり、学生を引き付けるものになっている。
- 附属図書館や情報メディア教育支援センターも充実しており、学生の独自の学びを支援している。
- 就職支援については、元教員による就職相談、また各都道府県、政令市の教員採用検査を受けた受験生による紙ベースでのデータの蓄積など、プレイメント・プラザ(就職支援室)は十分充実している。

- きめの細かな修学指導と学習支援体制が行われている。
- 大学院に留学生や障害を持つ学生を受け入れているが、それらの学生に合うべく指導内容や方法が工夫されており、そのことがカリキュラム改善、教材開発、指導法の改善に役立っている。

2 改善すべき点

- 余りに充実しすぎていて、教員へのカーナビ人生という感もして、本当にこれでいいのだろうかとも思う。学生時代は、いろいろ失敗したり、挫折したりで、しかし漂えども沈まず、試行錯誤の連続だと思うが、恵まれすぎて、ある意味同情もする。

3 改善、向上に向けた提言

- 上越教育大学の教育研究の中に、上越地域、北陸、日本海地域を位置付けた共同研究が散見されるが、このような視野と視座を有する教師・教育者を養成するためにも、学生が地域そのものの中で自主的活動を展開させるように更に学生支援等を充実させることも必要ではないか。
- 今の日本は、グライダー型の若者が多いことから、これだけ丁寧に指導するのは、仕方のないことかもしれない。しかし、将来手を離すために、今手をかけているという意識は、必要かもしれない。高校での指導の在り方等について、様々考えさせられたが、高校教育、大学教育の在り方について見直す時期かもしれない。
- 学生のための施設設備及び環境整備が充実しているが、学生のニーズの多様化に合わせて利用しやすいように更に整備して欲しい。
- 保健管理センターの精神保健相談実績を見ると、学部生に比べ大学院生の相談件数が多く、とりわけ大学院1年次生が極端である。いろいろな原因が考えられようが、入試や学生募集に関連があるかも知れないので検討して欲しい。

4 その他

- 特記事項なし

